“2021年から〝こども病院ボランボラコの会〟がはじまります！

―公益財団法人キリン福祉財団助成事業―

こども病院ボランティアとコーディネーターの会
ボランボラコ新聞

本会の前身は小児医療施設ボランティアコーディネーターの会です。こども病院の療養環境をボランティアの皆さんと一緒に考えたいと２０２１年４月から名をあらためて「ボランボラコの会」としてスタートします。お互いの病院を訪問したり、ＷＥＢでの情報交換、学習会開催なども企画予定です。

絵本作家のヨシタケシンスケさんが「ボランボラコの会」の挿絵を書いて下さいました。「コドモビョウインボランボラコノカイ」はみんなで手をつないで、病気のこどもたちの幸せを考えていく会です。第８号ではコロナ禍における各地のボランティア活動状況（裏面）と小児看護に執筆したボランティアコーディネーターらの感想、装飾ボランティアの声をお伝えしました。

ボランティアとコーディネーターが手をつないで歩もう

第８号 2021/8/30 発行
事務局　東京都新宿区若松町 10-1-302
080-5527-4379　代表　坂上和子

「小児看護」連載に執筆して

２０２０年６月から１２回連載
テーマ「小児医療施設ボランティア
コーディネーターの仕事」

★私がコーディネーターになってあっという間に４年が経過しました。そんな中での「小児看護」への連載。「コーディネーターって何をする人？」自問自答しながらこれまで実践した事を振り返るいい機会になりました。ほかの皆様の投稿からも学びや気づき・共感できることが多くありました。と同時に、思いを文字にすることの難しさも教えられました。今回の連載で、一人でも多くのコーディネーターが誕生してくれることを願います。私自身もこれまで以上に誇りをもって頑張っていきたいと思いました。沖縄こども医療センター　伊波邦子

★半ば蚊帳の外の立場ではないかと思っていましたが、「まだ同じような病院が多いから」と、唯一コーディネーターがいない立場で保育業務との兼務の難しさなどを綴らせていただきました。このような全国誌に“コーディネーターがいればもっと円滑に活動ができるのに”と不満にも取れる文面を掲載するリスクもありました。しかし、ボランティアの存在や活動による子どもやご家族へのメリットをアピールするきっかけは逃したくないと思う気持ちの方が強くありました。院内委員会で各部署に掲載の周知後には、「読んだよ」「コロナでもボランティアやれるといいよね」と院内で前向きなお言葉をかけていただくこともあり、発信していくことの大切さを実感しました。まだ理想の活動には遠く、コロナの影響もあり悩まされていますが、諦めず実現に向けて一歩ずつ近づけていきたいです。

あいち小児保健医療総合センター　金岡　好

★ボランティアがこどもたちの療養環境のために力になること、ボランティアをまとめ施設にとってもボランティアにとっても安心安全な活動になるようボラコの存在が必要であることを再認識しました。５病院の具体的な実践を改めて読むと、課題に取り組み改善につなげてきたことが分かります。他の病院の活動に比べ当院の取り組みはまだまだと実感しますが、目に見える活動の改善だけではなく、ボランティアと話をし充実感を共感するとか名前で呼ぶなどＶＣの取り組みですぐに実践していけることもあると励まされました。ボラコの会に参加して、よそを知ることで改善、実践につながる、まさにその通りと感じています。

静岡県立こども病院　薮崎和美

★ひとり職で悩みを抱えることの多い中で、コーディネーターの皆さんがそれぞれ奮闘されておられる様子がよくわかりました。それぞれの現場を詳しくご紹介頂き、たいへん参考になりました。現場の話ほど貴重で参考になる資料はありません。私にとって、今後の頼りになる資料となりました。連載での掲載により、看護の現場の方にも、小児病院ボランティア活動を深くご理解頂けたかと思います。

大阪母子医療センター　河盛久美子

★ボランティアコーディネーターの仕事を「見える化したい」、病院によって状況が異なるなか「情報共有したい」と思った時、「小児看護」に連載出来たら各病院のボランティアコーディネーターだけでなく、看護師や保育士にも伝わっていくのではないかと考えました。雑誌を出版しているヘルス出版の編集担当者にお願いして、連載の構成を作り上げました。まとめた事で、多くの方の目に触れ繋がっていく為の「スタート台」に立てた感じです。それぞれの状況を踏まえながら、共に進んでいきましょう。

神奈川県立こども医療センター　加藤　悦與

★小児看護のバックナンバーを見ますと、過去に子ども病院のボランティアコーディネーターとして小児看護に執筆されたのは梶山祥子さんだけでした。コーディネーターの方がいらしても、その仕事を発信していないと感じていました。この連載では、コロナ禍における各地のボランティア活動の厳しい状況とその中であきらめずに工夫したことなどにも触れています。ＮＰＯ法人病気の子ども支援ネット　遊びのボランティア

坂上和子

「コロナ感染症流行の中で」

神奈川県立こども医療センター
オレンジクラブ季節飾り　林美恵子

緊急事態宣言とまん延防止等重点措置が繰り返される中でのオレンジクラブの活動は、病院代表と加藤ボランティアコーディネーター、三木オレンジクラブ代表の間で合意された明確な基準のもとで行われています。緊急事態宣言の時は完全に活動中止ですが、まん延防止等重点措置の場合は、どうしても必要とされる活動や直接こども達と接しない活動に限り感染予防に細心の注意を払いながら自身の判断で活動に参加できます。

昨年の春から季節飾りは最小の人数で行うことになり、飾る場所も以前より少なくし、短時間（午前中のみ）で出来るように工夫しています。参加者はその折々の飾りを作った会員と力仕事と高所作業をお願いできる園芸班の方々です。いつもはホームページなどで参加者を募ってきましたが、それが出来なくなり、クリスマスの飾りつけに「今年はどんな飾りかしら、それを見たこども達はどんな表情をするかしら」とワクワクしながら参加できることを楽しみにしている方々がっかりしているのではと思っています。今回の７月の七夕飾りを片付けて８月の夏飾りに衣替えするタイミングが緊急事態宣言発出の前の土曜日でした。飾れて本当に良かったです。日本中の子どもたちが暑い毎日をお部屋で過ごすしかないのですが、さらに院内という特殊な環境の中で夏休みを過ごすこども達に、野原にいっぱい咲くヒマワリを想像してもらえたら嬉しいし、水族館に行った気分になってもらえたら最高に嬉しい活動になります。